

# 三重県

## 街道 1

三重県の特徴の一つは、和歌山県と同様、紀伊半島南岸に沿って熊野街道が通っていたため、その主要施設としての石畳が断続的に残っていることである。主要な石畳としては、横垣峠道の石畳（御浜町、江戸期?、国史跡）**A**、八鬼山道の石畳（尾鷲市、17世紀前半?、国史跡）**A**、松本峠道の石畳（熊野市、江戸期、国史跡）**A**、波田須道の石畳（熊野市、江戸以前、国史跡）**A** などがある。石畳の常として時代のはっきりしないものが多い。波田須道については鎌倉時代に遡るとい説もあるが、石の配置から見てそれほど古いとは思われない。写真は、土道も含むが総延長が10キロと最も長い横垣峠道の石畳と、石組が最も見事な松本峠道の石畳、江戸以前であることがほぼ確実な波田須道の石畳である。



## 街道 2

三重県の最大の特徴は伊勢神宮があり、そこが江戸時代最大の庶民のイベントであった伊勢参詣の目的地であったという事実である。誰もが、貧しくとも一生に一度は訪れたとも



言われる伊勢参詣は、お蔭年には爆発的な人数に達し、宝永のお蔭参り（1705）では300~400万人、明和のお蔭参り（1771）では200万人、文政のお蔭参り（1830）では閏3月から6月までの4ヶ月だけで427万6500人が伊勢を訪れたとされる。伊勢に至る参詣道は、江戸方面からだと東海道から伊勢街道に入るのが一般的だが、関西方面からだと出発的によつて北から伊勢別街道~伊勢街道、大和街道~伊賀街道~伊勢街道、初瀬街道~伊勢街道、伊勢本街道、和歌山街道~伊勢本街道、熊野街道など多くの選択肢があり、何れの街道沿いにも常夜灯と道標が完備された。

伊勢参詣に関わる常夜灯は伊勢講による太神宮常夜灯が大半を占め、竿の部分に「太神宮」「太一」「両宮」などと刻字されており、高さも4~8mと大きなものが多い。大里窪田町の常夜灯（津市、文化14(1817)）**A**〔上の写真〕は高さ8.6m、新田の太神宮常夜灯（名張市、慶応2(1864)）**A**は7.5m、それ以外に5m以上のものが少なくとも7基現存する（高さ不明のものが多いので実際にはもっと多いと思われる）。

また、石柱の上に檜皮葺の木製の火袋を置いた形式のものもあり（銅板葺に改修されたものも）、東海道・伊勢街



撮影:馬場俊介 (2011.12.10)



撮影:馬場俊介 (2009.3.6)

道の分岐点に立つ追分町の常夜灯（四日市市、安永3（1774）、県史跡）**A**〔上の写真〕が最も格が高い。

### 街道 3

道標も、常夜灯同様、背の高いものが多い。西原町の地藏道標（名張市、江戸期）**A**が高さ 338cm、香良洲町地家の道標（津市、文政 6（1823））**A**が 299cm、それ以外に 2m以上のものが少なくとも 10 基現存する。上右の写真は、東海道・伊勢街道の分岐点に立つ追分町の道標（四日市市、嘉永 2（1849））**A**で、上記の追分町の常夜灯と並んで立っている。

「左 いせ参宮道」と刻まれた道標は、江戸方面から訪れた旅人が等しく目にした重要な目印であった。

### 街道 4

町石としては、廃補陀落寺町石の町石群が特筆に価する。下の写真の基石と四丁石（伊賀市、建長 5（1253）、国史跡）**A**は、勝尾寺町石に次いで全国で



撮影:馬場俊介 (2011.5.14)

2番目に古い町石であり、かつ、紀年銘のある最古の町石でもある（勝尾寺町石は同時代の記録により年代を特定）。また、勝尾寺を含めた 13 世紀の町石がすべて、高野山か西国三十三ヶ所関連であることを考えると、補陀落寺になぜこれほど古い時代に町石が建立されたかについては、よく分かっていない。

### 舟運 1

三重には全国的に見て重要な方角石が 2 つある。一つは、大的矢の初代方角石（志摩市、1700 年代?）**A**で、文政 5（1822）の大的矢の方位石よりも古いことから、初代の方角石と推定されている。そして、初代のものが僅か 20 年で交換されたとは思えないので、現在日本最古とされている輪島の方角石（1804）より建立年が遡る可能性は高い（真の日本最古は琉球王国の方角石）。

鳥羽の方角石（鳥羽市、文政 5（1822）、市有形民俗）**A**〔写真〕は、大的矢の方位石と同年だが、原位置にある方角石としては輪島の方角石に次いで古く、かつ、八角柱の上に円形の方位盤を乗せた形、刻字のすべてが明瞭に判読できる保存状態の良さから、日本の方角石を代表的する遺産である。

提供:神宮巡々(<http://jingu125.info/>)



### 農業 1

三重県独自の農業遺産として北勢地方のマンボがある。マンボは間歩が訛った用語であり、灌漑用の素掘りのトンネルを指す。普通の農業用水のトンネ



ルは、水源地と需給地を結ぶ水路の途中にある回避できない山を貫通させるためのものだが、マンボはトンネルそのものが伏流水や地下水を集水する目的で掘られた施設である。最も大規模な片

樋マンボ（いなべ市、明和 7（1770）頃、市史跡）**A** では、全長約 1 キロの間 10～30m 間隔で竪穴が掘られ、全体の形態は中東のオアシス農業を支えるカナートに似ている（機能は全く異なる）。

### 農業 3

丸山千枚田（熊野市、慶長 6（1601）以前）**A** は国内最大級の棚田であるが、棚田オーナー制をいち早く導入し、丸山千枚田条例を制定するなど、棚田の保全に積極的に取り組んできたことでも知られる。

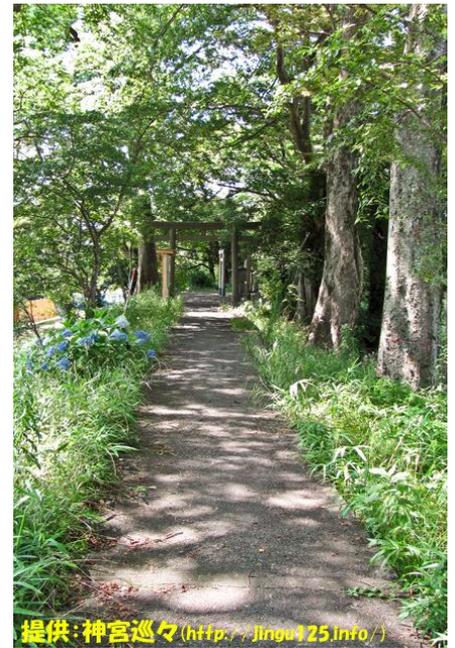
### 鉱業 1

古代から鎌倉時代にかけて日本を代表する水銀の生産地だった丹生鉱山の最大の鉱区が篠原の水銀採掘坑群（多気町）**A** である。古代の『続日本紀』『延喜式』に記載され、奈良の大仏の建立・再建時にも使われたとされる（写真は馬ノ谷地区）。



### 防災 1

伊勢神宮のある地域は天領だったため、防災に関しては山田奉行所が地元民と幕府の間を取り持った。特に、暴れ川だった宮川を治めるため、五代奉行が宮川堤（伊勢市、17 世紀前



半）**B** と浅間堤 **B** を、十一代奉行が駿河堤（17 世紀末）**C** を、十二代奉行が周防堤（18 世紀初頭）**C** を築き、今でも芻出しが残っている。特に浅間堤の芻出しは上部が快適な歩道となり、先端に顕彰碑もあることから、宮川の新堤防計画は遺構に配慮した形で策定された。

### 防災 1

全国で近世の津波記念碑が建立されるのは、房総、伊豆、紀伊の 3 半島の東岸と、四国の徳島と高知の東海岸の 5 ヶ所である。三重県には 11 基が現存し、17 基の高知県、15 基の徳島県に次いで多い。ただ、北浦町の三界萬霊塔（尾鷲市、正徳 3（1713））**B** を除けば、被害の状況はほとんど記載されていない。

### 防衛 1

一身田寺内町の環濠（津市、文禄元（1592）以前）**A** は、高田専修寺の第十世住持・真慧が文明年間の初めに建立した無量寿寺を母体とし、天正 8（1580）に焼失した堂宇の再建後に寺院主導で形成された。全国の寺内町の中で囲郭の保存が最も良好と言われている。ただ、それは環濠が“ある”というだけで、毛無川の部分以外はコンクリート化されている。また、寺内町の本来の定義である「濠・土居などで防禦された囲郭都市」の“防禦”という機能は薄いように思われる。